第 13 回 JAILA 全国大会

プログラム・発表概要

第 2 版

東京都市大学

世田谷キャンパス（1 号館 3 階）

2025 年 3 月 15 日（土）

JAILA
The Japan Association of International Liberal Arts

はじめに

第 13 回 JAILA 全国大会は、2025 年 3 月 15 日（土）、東京都市大学（世田谷キャンパス）を会場に、対面で開催します。当大会は、一部オンラインでの視聴も可能なハイブリッド開催となっています。大会案内ページにて、概要をご確認ください。

「大会案内ページ」

大会参加には、事前の申込手続きが必要です。JAILA 大会案内ページ（上記リンク）内の「■ 参加申込」において受け付けておりますので、参加希望の方は、上記ページをご覧の上、期日までにお申込ください。

オンライン参加にかかわる具体的事項につきましては、別途、特設サイトに掲載します。特設サイトへのアクセスに必要な情報等は、大会参加申後（大会開催日まで）に、JAILA 事務局からメールでお知らせします。非会員の方におかれましては、オンラインのみの参加の場合でも、申込手続きが必要となります。

多くの皆様のご参加をお待ちしております。

本冊子には、当大会（対面）の概要および研究発表プログラムおよび発表概要を掲載しています。

ご不明な点がありましたら、大会運営事務局（office@jaila.org）にお問い合わせください。

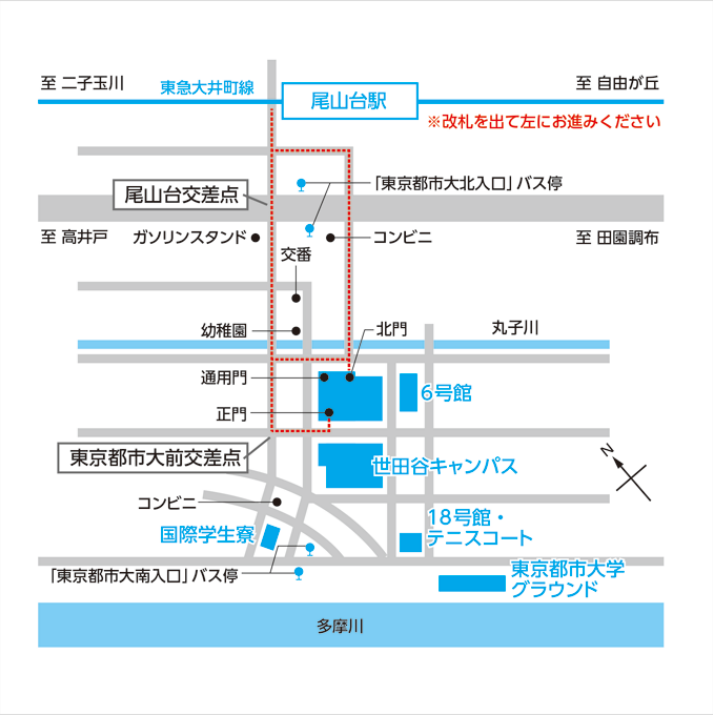
改訂履歴

第 1 版	2025 年 2 月 18 日	初版公開
第 2 版	2025 年 2 月 21 日	・ヘッダ修正（開催校表記） ・タイムテーブル修正（登壇者の所属修正） ※時間の修正はありません ・レイアウト調整

大会概要

【日時】 2025 年 3 月 15 日（土） 9 時 15 分～ ※ 受付開始 8:45～

【会場】 東京都市大学 世田谷キャンパス（1 号館 3 階）
〒158-8557 東京都 世田谷区 玉堤 1-28-1



東京都市大学より許可得て転載（https://www.tcu.ac.jp/access/）

東京都市大学より許可得て転載（https://www.tcu.ac.jp/campuslife/introduction/setagayacampus/）

当日は、「正門」よりお入りください。北門・通用門は開きません。

【交通】 東急大井町線 尾山台（東京都市大学 世田谷キャンパス前）駅下車 徒歩(12 分)

尾山台駅からは、途中から長い下り坂になりますので、お気をつけてお越しください。

関西方面からお越しの際は、新横浜のりかえ、東急新横浜線で多摩川駅下車が便利です。

多摩川駅から約 10 分毎に、東急バス（玉 11）二子玉川行き乗車 6 分。二子玉川駅からは同バスで 12 分。

【関連リンク】

［交通アクセス］	東京都市大学世田谷キャンパスへのアクセス（東京都市大学 Web サイト） https://www.tcu.ac.jp/access/
［構内図］	東京都市大学世田谷キャンパスガイド（東京都市大学 Web サイト） https://www.tcu.ac.jp/campuslife/introduction/setagayacampus/

【参加費】　正会員　無料、当日会員 1,000 円※1、学生（フルタイム）・開催校関係者無料

※1 オンラインのみの参加の場合は無料です
※2 情報交換会（懇親会）については、別途費用がかかります

【申込手続き】

参加には事前の申込が必要です。大会案内ページの「■参加申込」より申込可能です。

大会案内ページへ

［申込期限］　**3 月 10 日（月）**

※ **情報交換会にご参加の方は 3 月 5 日までに**お申し込みください。

※ JAILA 会員の方におかれましても、**対面参加の場合**は、申込手続きが必要です。ただし、JAILA 会員で、かつ、オンラインのみの参加の場合は、申込不要です。

※ 口頭発表、ポスター発表の参加者におかれましても、（代表者のみでなく）皆様各自でお申し込みください。

【昼食について】

・大会当日、学食が営業予定（11 時～14 時）。徒歩圏内にコンビニ 3 軒、飲食店若干。

【情報交換会（懇親会）】

時間	18：15～20：15
場所	東京都市大学世田谷キャンパス店［1 号館 4 階　ラウンジオーク］
会費	6,000 円、学生は 3,000 円　（変更の可能性あり）

※ 事前の申込が必要です（大会参加申込時に、情報交換会への参加希望の有無を指定ください）。

※ 情報交換会に参加の方は 3 月 5 日までにお申し込みください。席数に限りがありますので、人数の上限に達した場合には途中で締め切りとさせていただく場合があります。ご了承ください。

【開催判断について】

気象特別警報等の発令や大規模災害の発生等、大会参加者に危険が及ぶ恐れがある場合、開催にあたっての責任者（日本国際教養学会会長もしくは開催校委員長等）は、大会の開催中止を決定することがあります。開催中止と決定した場合には、直ちに JAILA Web サイト（トップページ）および大会案内ページ、電子メール（お申し込み時の登録したメールアドレス宛）にて告知します。

【問い合わせ先（JAILA 事務局）】

〒700-8530　岡山市北区津島中２－１－１
岡山大学　教育推進機構
五十嵐潤美　研究室
電子メールアドレス：　office@jaila.org

■ タイムテーブル

日本国際教養学会：　2025年3月15日（土）　東京都市大学世田谷キャンパス

JAILA　第13回全国大会プログラム

8:45-	受付（１号館３階）			
9:15-9:25	開会式（１３Ｑ教室）			
教室	１３Ｃ教室	１３Ｄ教室	１３Ｅ教室	１３Ｆ教室
Session 1 司会	漆畑 祐佳 （静岡県立静岡商業高等学校）	寺西 雅之 （兵庫県立大学）	北 和丈 （東京理科大学）	那須 雅子 （岡山大学）
9:30-10:00	発表① 日本の小学校における国際教育の実践可能性に関する実証的研究—教員の国際教育実践の資質能力に関する仮説検証— 清水 彩 (関西学院大学大学院国際学研究科)	発表④ 英語に堪能な小学校教師の英語音声指導観の変容過程①—若手から中堅への移行期における「他者からの学び」に関する省察に焦点をあてて— 和田 あずさ（宮城教育大学）・ナットチー 直子 (能勢ささゆり学園)	発表⑦ 時事英語コーパスに基づく実用英語に見られる連語表現の分析 山本 五郎 (法政大学)	発表⑩ 大学教員による第三の職域としての学修支援 大西 好宣 (千葉大学)
10:05-10:35	発表② 異文化接触が岩国市民の意識変容に及ぼす影響—岩国市英語交流センター（PLAT ABC）における岩国基地や市内在住外国人との交流を通して— 永木 健一 (山口県立大学大学院国際文化学研究科)	発表⑤ 教師の信念が形作る支援と実践—多文化にルーツをもつ児童生徒への柔軟なアプローチ— 坂本 南美 (同志社大学)	発表⑧ 文学テクストの空所を進化心理学で埋める—ホーソーンの『緋文字』を中心に— 藤沢 徹也 (広島商船高等専門学校)	発表⑪ リベラルアーツとエンダウメント 長野 公則 (国際公認投資アナリスト, 博士 (教育学・東京大学))
10:40-11:10	発表③ 山口県の技能実習生の日本語学習の動機づけに関する考察 本間 星成 (山口県立大学大学院国際文化学研究科)	発表⑥ L1での相互行為能力はL2での相互行為能力と何か関係があるのか：日本人英語学習者による「断り」遂行に着目した一探索的事例研究 鈴木 浩輔 (呉工業高等専門学校)	発表⑨ Lord, Grant Him Thy Peace: “A Song for Simeon” by T.S. Eliot Exploring the Bond between Text and Reader Anna-Maria HATA (The University of Tokyo)	発表⑫ 再生可能エネルギーの導入が空気質に与える影響 李 広遠 (東洋大学大学院)・芝崎 誠司 (東洋大学大学院)
11:10-11:20	休憩			
11:20-12:20	特別教室（ハイブリッド・ライブ配信） 特別講演：ただ落ち込むこととうつ病の境界線 講師：黒沢 顕三 (JCHO東京新宿メディカルセンター 精神科主任部長) 司会：深谷 素子 (鶴見大学)			
12:20-13:10	ランチ・タイム			
13:10-14:10	ポスター発表（1号館13M教室）			
教室	１３Ｃ教室	１３Ｄ教室	１３Ｅ教室	１３Ｆ教室
Session 2 司会	風早 由佳 （岡山県立大学）	Anna-Maria HATA （東京大学）	和田 あずさ （宮城教育大学）	内山 八郎 （徳島大学）
14:20-14:50	発表⑬ 台湾の飲食店における素食対応表示—日本のインバウンド観光への手がかりとして— 徐 沇廷 (岡山商科大学)・松浦 芙佐子 (岡山商科大学)・黎 暁妮 (岡山商科大学)	発表⑯ Examining the Relationship Between Creative Thinking and Specific Types of L2 Speaking Performance UEHARA Soshi (Hiroshima University Undergraduate Student)	発表⑲ コラボレーション・ライティングを通じた「対話的な学び」の質的研究——バフチン的ポリフォニーの視点から—— 漆畑 祐佳 (静岡県立静岡商業高等学校)・那須 雅子 (岡山大学)	発表㉒ センテンス・コンバイニング練習が英作文の複雑さに及ぼす影響 麻生 雄治 (大分大学)
14:55-15:25	発表⑭ 日本文化の総合理解と異文化コミュニケーションにおける「和菓子」利用の有効性 須川 妙子 (愛知大学)	発表⑰ Formeaning Response Approachを用いた詩の読解が日本人高校生の言語能力に与える影響—意味構築の活動を通じた推論力の向上を目指して— 形山 羽奈 (広島大学大学院博士課程前期)	発表⑳ B. Kumaravadivelu の KARDS (Knowing, Analyzing, Recognizing, Doing, and Seeing) を用いた日本の英語科教員の資質能力の探求 渡邉 大太 (兵庫県立大学・環境人間学研究科)・寺西 雅之 (兵庫県立大学・環境人間学部)	発表㉓ Beliefs and Strategies in English Learning Among Japanese University Students 王 鏡洲 (岡山大学大学院社会文化科学研究科)
15:30-16:00	発表⑮ 在日コリアン女性の育児における社会関係とケアの生成：民族とジェンダーの交差性からの考察 ウィックストラム 由有夏 (武庫川女子大学)	発表⑱ 背外側前頭前野の賦活から見た日本人大学生英語学習者の英語詩読解時の反応—英語詩タイプとテクスト・エンゲージメントタイプの影響— 西原 貴之 (広島大学)	発表㉑ 学習指導要領と検定教科書の変遷からみる英語科授業での音読活動 奥石 采佳 (東京大学大学院教育学研究科)	発表㉔ メタバース上での主観評価測定のためのツールの開発と評価 李 明宜 (東京大学工学系研究科システム創成学専攻)
16:00-16:10	休憩			
16:10-17:40	１３Ｐ教室（ハイブリッド・ライブ配信） シンポジウム：経験を語る、教育を紡ぐ—ナラティブ研究の新たな可能性— 講師：坂本 南美 (同志社大学)・渡辺 敦子 (文教大学)・石野 未架 (同志社大学)・久世 恭子 (東洋大学 / The University of Liverpool: オンライン登壇)・寺西 雅之 (兵庫県立大学)・那須 雅子 (岡山大学)・Karen E. Johnson (The Pennsylvania State University: ビデオ登壇)			
17:40-18:00	閉会式・総会（１３Ｐ教室）			
18:30-20:30	情報交換会（懇親会）（1号館4階カフェテリア）			

研究発表・講演概要　目次

研究発表・午前の部 ［13C 教室］ 9:30-10:00 / 10:05-10:35 / 10:40-11:10 1

日本の小学校における国際教育の実践可能性に関する実証的研究—教員の国際教育実践の資質能力に関する仮説検証— 1

異文化接触が岩国市民の意識変容に及ぼす影響—岩国市英語交流センター（PLAT ABC）における岩国基地や市内在住外国人との交流を通して— 1

山口県の技能実習生の日本語学習の動機づけに関する考察 2

研究発表・午前の部 ［13D 教室］ 9:30-10:00 / 10:05-10:35 / 10:40-11:10 2

英語に堪能な小学校教師の英語音声指導観の変容過程①—若手から中堅への移行期における「他者からの学び」に関する省察に焦点をあてて— 2

教師の信念が形作る支援と実践—多文化にルーツをもつ児童生徒への柔軟なアプローチ— 3

L1 での相互行為能力は L2 での相互行為能力と何か関係があるのか：日本人英語学習者による「断り」遂行に着目した一探索的事例研究 3

研究発表・午前の部 ［13E 教室］ 9:30-10:00 / 10:05-10:35 / 10:40-11:10 4

時事英語コーパスに基づく実用英語に見られる連語表現の分析 4

文学テクストの空所を進化心理学で埋める—ホーソーンの『緋文字』を中心に— 4

Lord, Grant Him Thy Peace: “A Song for Simeon” by T.S. Eliot Exploring The Bond between Text and Reader. 5

研究発表・午前の部 ［13F 教室］ 9:30-10:00 / 10:05-10:35 / 10:40-11:10 5

大学教員による第三の職域としての学修支援 5

リベラルアーツとエンダウメント 6

再生可能エネルギーの導入が空気質に与える影響 6

研究発表・午後の部 ［13C 教室］ 14:20-14:50 / 14:55-15:25 / 15:30-16:00 7

台湾の飲食店における素食対応表示—日本のインバウンド観光への手がかりとして— 7

日本文化の総合理解と異文化コミュニケーションにおける「和菓子」利用の有効性 7

在日コリアン女性の子育てにおける社会関係とケアの生成：民族とジェンダーの交差性からの考察 .. 8

研究発表・午後の部 ［13D 教室］ 14:20-14:50 / 14:55-15:25 / 15:30-16:00 8

Examining the Relationship Between Creative Thinking and Specific Types of L2 Speaking Performance 8

Formeaning Response Approach を用いた詩の読解が日本人高校生の言語能力に与える影響—意味構築の活動を通じた推論力の向上を目指して— 9

背外側前頭前野の賦活から見た日本人大学生英語学習者の英語詩読解時の反応—英語詩タイプとテクスト・エンゲージメントタイプの影響— 9

研究発表・午後の部 ［13E 教室］ 14:20-14:50 / 14:55-15:25 / 15:30-16:00 10

コラボレーション・ライティングを通じた「対話的な学び」の質的研究——バフチン的ポリフォニーの視点から—— 10

B. Kumaravadivelu の KARDS (Knowing, Analyzing, Recognizing, Doing, and Seeing) を用いた日本の英語

科教員の資質能力の探求 10
学習指導要領と検定教科書の変遷からみる英語科授業での音読活動 11

研究発表・午後の部 ［13F 教室］ 14:20-14:50 / 14:55-15:25 / 15:30-16:00 11
センテンス・コンバイニング練習が英作文の複雑さに及ぼす影響 11
Beliefs and Strategies in English Learning Among Japanese University Students 12
メタバース上での主観評価測定のためのツールの開発と評価 12

講演／シンポジウム（午前の部） ［13Q 教室＋ハイブリッド・ライブ配信（Zoom）］ 11:20-12:20 13
特別講演：ただ落ち込むこととうつ病の境界線 13

講演・シンポジウム（午後の部） ［13P 教室＋ハイブリッド・ライブ配信（Zoom）］ 16:10-17:40 13
シンポジウム：経験を語る、教育を紡ぐ―ナラティブ研究の新たな可能性― 13

ポスターセッション 13M 教室：対面＋オンデマンド（PDF 閲覧） 13:00-14:00 / 3/8～3/23 14
Bootstrapping: Its concepts and applications in statistical analysis 14
プログラミング的思考力を身につける CLIL 授業教材の提案 14
協働学習を通じた学習者の発音への意識変容調査 14
海外文化紹介のためのデザイン提案 15
2000 年代ライトノベルと江戸期黄表紙に見るパロディの系譜―アダプテーション論を背景に― 15
スイスの観光地を巡るコミュニケーションの分析―環境、文体、異文化理解の視点から― 16
サーキュラーエコノミーにおける建築設計・街づくりの事例視察及び現地住民に与える効果測定 16
日米の大学間協働による国際理解教育の試みと成果―異文化交流の形態の差異に着目して― 17
大学生の英語学習動機とライフストーリー：専門領域との結びつきに注目して 17
インドに渡った日本画家たち―伝統とその概観― 17

ポスターセッション オンデマンド（PDF 閲覧）：特設サイトより閲覧 13:00-14:00 / 3/8～3/23 18
Shared Reading and Its Application in English Teaching in Japan 18
「俊寛」から見るナラティブの変容 18
地域在住外国人との交流活動が高校生の異文化理解意識に与える影響―国際交流協会と連携した授業の実践を通して― 19
公立小学校 4 年生を対象とした SDGs の視点に基づく教科横断的指導の実践―伝統工芸をテーマにした国語科と社会科の単元設計と評価― 19
「総合的な探究の時間」に対する生徒の認識と批判的思考態度との関係性―国際バカロレア「知の理論」と比較して― 20
アメリカ映画にみる呼称 20
大学を核とした地域活性化の実現に向けた提言（博論ワークインプログレス） 20

JAILA 第 13 回全国大会　研究発表および特別講演・シンポジウム概要

研究発表・午前の部 ［13C 教室］　9:30-10:00 / 10:05-10:35 / 10:40-11:10

発表①

日本の小学校における国際教育の実践可能性に関する実証的研究—教員の国際教育実践の資質能力に関する仮説検証—

清水 彩　関西学院大学大学院国際学研究科

2005 年、文部科学省は国際教育を「国際社会において、地球的視野に立って、主体的に行動するために必要と考えられる態度・能力の基礎を育成するための教育」と定義した。グローバル時代と言われる昨今、その重要性は論をまたないが、国際教育は小学校現場において実践可能なのであろうか。本研究では、「教員は国際教育の授業実践を行う資質能力が身についている」と仮説を立て、文部科学省の推進する小学校の国際教育の実践可能性を検証した。教員養成課程や教員研修の内容が、国際教育の授業実践を行う資質・能力が身につくものとなっているか、滋賀大学教育学部のシラバスや滋賀県総合教育センター、滋賀県教育委員会等の研修情報を調査した。加えて、滋賀県湖東地域の 40 校の教員に対して、受講した国際教育の研修や海外渡航歴、外国語運用能力などの属人的な資質能力についてのアンケート調査を実施した。結果は本会にて発表する。

発表②

異文化接触が岩国市民の意識変容に及ぼす影響—岩国市英語交流センター（PLAT ABC）における岩国基地や市内在住外国人との交流を通して—

永木 健一　山口県立大学大学院国際文化学研究科　学生

山口県岩国市では、英語教育や英語を核としたまちづくりを進めている。米軍基地を地域の資源として活用し、英語による交流を促進するための交流拠点の設置は、日本国内では類を見ないものと考える。令和４年３月に供用開始した、岩国市英語交流センター「PLAT ABC」の活動において、市民に対する異文化へ理解や国際意識の変化、コミュニケーション力の向上などについて、どのような意識の変化が現れるか、実践を通して考察する予定である。
発表者は、令和６年７月から、施設を利用する、小学５、６年生、中学生、高校生、一般市民を対象にアンケート調査を継続して実施しており、令和６年 12 月現在、約 200 名の方々から聴取している。本発表では、その集計結果と傾向について中間発表を行う。

発表③

山口県の技能実習生の日本語学習の動機づけに関する考察

本間 星成　山口県立大学大学院国際文化学研究科　学生

山口県では現在、在留外国人のうち技能実習生が全体の 21.7%を占めている。現在技能実習生の受け入れに関しては、一部の職種を除いては日本語のレベルが設定されていない。そのため地域社会に焦点を当てると、言語や文化の壁により地域住民と十分なコミュニケーションが取れず、孤立状態に陥る、または地域住民と衝突することがある。技能実習生は日本語を使う機会が職場や地域コミュニティのみと非常に限定的である。本研究は、技能実習生がどのような日本語を必要としているのか調査し、技能実習生の日本語学習への動機づけを向上させるためにはどのような日本語学習が必要であるか明らかにすることをその目的とする。日本語学習と地域との関わりの重要性・必要性を関連させた指導を行うことによって、地域共生ができる技能実習生を増加させることができると考えられる。調査は技能実習生とその勤務先の事業所に対して量的調査と質的調査を行う。

研究発表・午前の部 ［13D 教室］　9:30-10:00 / 10:05-10:35 / 10:40-11:10

発表④

英語に堪能な小学校教師の英語音声指導観の変容過程①—若手から中堅への移行期における「他者からの学び」に関する省察に焦点をあてて—

和田 あずさ　宮城教育大学
ナットチー 直子　能勢ささゆり学園

本研究は、英語に堪能な小学校英語教師を事例とし、音声指導の実践と省察の変容を通して、授業者の小学校英語教師としての成長過程を導出することを主題とする経年的な取り組みである。授業者は、小学校教師としての指導経験年数が 6 年目となり、若手から中堅への移行期を迎えている。授業者はこれまで、発音の多様性を認めようとする信念と英語らしい特徴を保った発音を重視しようとする信念の対立から、実際の音声指導に関する葛藤を抱いてきた。他方、2024 年においては、発音の多様性をめぐって、他の外国語専科教師や学級担任など、前年度まで授業者が言及してこなかった他者の影響がうかがえる省察が確認されている。本発表では、このような授業者の語りの変容に着目して、音声指導に関する授業内の授業者の実際の言動と、その背景にある心的過程、およびこれらについての省察に関する解釈を取り上げる。

発表⑤

教師の信念が形作る支援と実践—多文化にルーツをもつ児童生徒への柔軟なアプローチ—

坂本 南美　同志社大学

移民受け入れの歴史が長い欧米諸国では、移民児童生徒の学校環境への適応や受け入れ側の態度に関する研究が広く行われてきた。学校不適応の心理的要因としては、ホスト社会の偏見、移住先での親の孤立、文化的葛藤などが指摘されている。一方、日本では移民児童生徒側に焦点を当てた研究は多いが、受け入れる教師の内面に注目した研究はほとんどない。本研究では、移民児童生徒が一定数通う A 県の学校で教壇に立つ教師のナラティブに焦点を当て、異文化にルーツをもつ学習者のいる学級・授業運営で内面を支える要素、葛藤、信念を探った。具体的には、教諭浩二への半構造化インタビューを社会文化的視点から質的に分析した。その結果、授業とそれ以外の場面とを異なる関係性構築の場と捉え、支援のアプローチを柔軟に変えている教師の所作が明らかになった。本成果は、多様化が進む日本の移民児童生徒への教師の支援を考える上で重要な示唆を含むものである。

発表⑥

L1 での相互行為能力は L2 での相互行為能力と何か関係があるのか：日本人英語学習者による「断り」遂行に着目した一探索的事例研究

鈴木 浩輔　呉工業高等専門学校

社会において頼む・断るといった行為を円滑に行うには、他者とのやりとりの中で、相手に合わせて自身の発話を調整したり相手に配慮を示したりしながら行為を遂行する相互行為能力が必要である。L2 学習者の相互行為能力は、近年研究が進展しているものの、L2 での相互行為能力と L1 での相互行為能力の関わりは十分に検討されていない。本研究は、日本人英語学習者を対象としてこの関係を探索することを目的とする。具体的には、特に高度な相互行為能力を必要とする「断り」場面に着目し、参加者から日本語の「断り」データと英語の「断り」データを収集する。収集した両データについて、相互行為能力の分析観点から特徴を比較し、参加者の L1 での相互行為能力と L2 での相互行為能力の関わりを検討する。そして学習者の L2 相互行為能力を向上させるには、L1 での相互行為能力も考慮する必要があるのかを考察する。

研究発表・午前の部 ［13E 教室］ 9:30-10:00 / 10:05-10:35 / 10:40-11:10

発表⑦

時事英語コーパスに基づく実用英語に見られる連語表現の分析

山本 五郎 法政大学

実践的な英語力の育成に関しては、現代の社会問題及び現代社会で広く受け入れられている概念・価値観・生活様式などを反映した語彙を習得することの重要性が先行研究で示されている。同様に連語表現についても実用英語で用いられる表現群を明示しその特性を把握することは重要であるが、これまでの研究では、教授法や学習法、英語学習者の誤用などに焦点を当てた研究や動詞と前置詞の繋がりなど高頻度に使用されるパターンを構造的に分類した研究が多く、教養科目としての英語教育という観点から学習対象とすべき連語を扱った研究は充分には行われていない。本発表では、実用英語として 2021 年から 2023 年に出版された主だった英語の時事雑誌から独自にコーパスを構築し、そのデータを基に現代英語で特徴的に用いられる連語表現について、2020 年以前のデータを基にした既存の大規模コーパスとの比較分析などを通して、用例を示しながらその特性について論じる。

発表⑧

文学テクストの空所を進化心理学で埋める—ホーソーンの『緋文字』を中心に—

藤沢 徹也 広島商船高等専門学校

テクストの空所は歴史的・文化的事実や他者などの概念で埋められることもある。その空所が埋まるかどうかは、論の説得力にかかっていると言えよう。一方、テクストに足がかりがないと空所を埋めることができない。その場合、推測することしかできず、説得力のあるものにはなりにくい。
文学が人間の本性に迫ろうとすることに疑いはなく、進化心理学も同様である。この学問は人間の体が自然選択によって進化したように、心も環境の変化や生存・繁殖の競争に適応して進化してきたという考え方を基本としている。その心は狩猟採集時代に定まり現代も変化していない。満腹でもケーキを見ると食べたくなるのは、その昔、高カロリーのものに引き寄せられたことに関係している。
『緋文字』は読者の「テクスト外推測」によって成立しているとも言われている。テクストの空所を進化心理学の知見で埋めることによる学際的な手法で、この作品の読みに新たな光を当てたい。

発表⑨

Lord, Grant Him Thy Peace: "A Song for Simeon" by T.S. Eliot Exploring The Bond between Text and Reader

Anna-Maria HATA　The University of Tokyo

"We listen while we read," Garrett Stewart suggests, proposing that reading engages both visual and auditory faculties, intertwining text and sound. This concept is particularly compelling in the context of poetry, a medium rooted in oral traditions where voice and melody have historically been central, much like prayer. But what, exactly, do we listen to? This presentation explores the sound produced by the reader—our sound. Through an analysis of T.S. Eliot's "A Song for Simeon," this study examines how the prosody of the text interacts with the reader, and how the reader, in turn, engages with the prosody. It specifically analyzes the physical act of articulating sounds, focusing on the movements of the tongue, lips, vocal cords, and other articulators that generate layers of sound patterns. This analysis demonstrates how we, as readers, can connect with the murmured song of/for the aged Simeon, uncovering deeper layers of meaning. Ultimately, it underscores the enduring significance of the multisensory bond between the reader and the text. In today's AI-driven era, where text is detached from our hands and read by a crisp voice, how we listen while we read might reconnect us to the essence of reading poetry.

研究発表・午前の部 ［13F 教室］　9:30-10:00 / 10:05-10:35 / 10:40-11:10

発表⑩

大学教員による第三の職域としての学修支援

大西 好宣　千葉大学

大学教員の伝統的な役割が、教育と研究の二つであることは誰も疑わないだろう。けれども、大学への進学がユニバーサル段階に入り、学生の様相がかつてなく多様化した現代の日本で、彼らをより良い学びへと導く学修支援（アカデミック・アドバイジング）は、教員にとって第三の職域となり得る専門的な分野である。従来、広義の教育或いは狭義の研究指導などに含めて捉えられていた学修支援は、近年の「キャリア」概念の変化と共に個別の対応を要求され、さらには student success というより長期的な目標のもとに展開されることが求められている。本発表では、事務系職員が中心となって学修支援に取り組む米国の事例と、教員が中心となって取り組む英国或いは欧州の事例を対比しながら、わが国の大学での在り方について考えたい。

発表⑪

リベラルアーツとエンダウメント

長野 公則　国際公認投資アナリスト，博士（教育学・東京大学）

アメリカの大学は、大規模な研究大学や州立大学と並んで比較的小規模なリベラルアーツ・カレッジが独自の歴史を持っている。リベラルアーツ・カレッジは少人数教育と探求型教育を特色とすることにより、現在も生き残りを図っている。
本発表では、これらのアメリカのリベラルアーツ・カレッジの最新の動向を、エンダウメントの観点を含めて分析し、日本の大学への示唆を探る。

発表⑫

再生可能エネルギーの導入が空気質に与える影響

李 広遠　東洋大学大学院　学生
芝崎 誠司　東洋大学大学院

日本における空気の清浄度はアジアの中では高い水準にある。しかし、2023 年度、汚染濃度の高さは 96 位（134 カ国中）であり、WHO の安全基準値を超えている。また、都市部におけるエネルギー消費の増加は、空気質の悪化や健康被害の増大を引き起こす主な要因として広く認識されている。本研究では、エネルギー消費量が空気質指数（AQI）に与える影響について分析し、再生可能エネルギーの導入が空気質改善にどの程度寄与するかを明らかにすることを目的とする。方法としては、国内複都市のデータを用いて時系列回帰分析を実施し、AQI を従属変数に、再生可能エネルギーの導入率を独立変数として、自然、社会、医療の要素も加えた線形モデルの構築を目指した。初期結果では、エネルギー消費の増加が空気質を悪化させる一方、再生可能エネルギー普及は一定の改善に寄与することが確認された。今後は地域間比較や国際的なデータを用いた分析も進める予定である。

研究発表・午後の部 ［13C 教室］ 14:20-14:50 / 14:55-15:25 / 15:30-16:00

発表⑬

台湾の飲食店における素食対応表示―日本のインバウンド観光への手がかりとして―

徐 沇廷 岡山商科大学
松浦 芙佐子 岡山商科大学
黎 暁妮 岡山商科大学

インバウンド旅行者数の回復著しい昨今であるが、ベジタリアン・ヴィーガン旅行者が食事の心配なしに日本国内を旅行することが難しい状況に変わりはない。他方、台湾では素食の文化が根付いており、素食専門の飲食店も多く、そのような心配せずに滞在できる。
本発表では、台湾の素食専門の飲食店および素食を専門としない飲食店におけるベジタリアン・ヴィーガン対応について、対応の可否やベジタリアン・ヴィーガンの種別など旅行者が飲食店を決定するのに重要な情報が、飲食店内外の掲示やメニュー、ウェブサイトにどのように示されているのか、言語およびピクトグラムによる表示のあり方を分析する。それに基づき、ベジタリアン・ヴィーガンが旅行しやすい環境整備のため日本の飲食店のとるべき対応について考察する。

発表⑭

日本文化の総合理解と異文化コミュニケーションにおける「和菓子」利用の有効性

須川 妙子 愛知大学

和菓子は様々な日本文化を取り込んで創造される。味わいは味覚にとどまらず造形美や銘を鑑賞する視覚、想像の味わいもある。抽象的な形、銘には絵画や文学等の芸術分野の影響がみられ、日本文化の美意識を感じ取ることができる。こうした特徴をもつ和菓子は日本文化の総合的理解の媒介となる。大学生対象の和菓子をテーマにした授業や国際交流プログラムを通して、受講生の文化に対する意識変化がみられた。和菓子の鑑賞は、日本文化の芸術的要素を読み取ることである、和菓子製作は日本文化のあらゆる分野から得る感覚・感情・感性を表現することであると、さまざまな日本文化の総合的な理解に繋がった。また、和菓子は場の状況や相手に応じて自由に創造できるものであり、柔軟に変容可能であるとの理解が、異なる文化背景をもつ人とのメッセージ交換すなわち異文化コミュニケーションの手段に成り得るとの気づきとなり、異文化/他者の理解/許容に繋がった。

発表⑮

在日コリアン女性の子育てにおける社会関係とケアの生成：民族とジェンダーの交差性からの考察

ウィックストラム 由有夏　武庫川女子大学

日本社会における子育ての困難に関する研究は、特に母親が孤独に子育てを担う「孤育て」が社会問題化する中で、社会学や看護学などの分野で多くの知見が蓄積されてきた。しかし、在日コリアン女性の子育てに焦点を当てた質的研究はほとんど行われていないのが現状である。本研究では、在日コリアン女性へのインタビューを通じて、子育てにおいて誰からどのようなサポートを受けているのか、またどのような困難を抱えているのかを明らかにすることを目的とする。2023 年 9 月から 2024 年 9 月にかけて、子育てを経験している（または経験した）在日コリアン女性 17 名に半構造化インタビューを実施し、個々の子育て体験や周囲との関係性に焦点を当ててデータを収集した。本発表では、これらの調査結果を基に、在日コリアン女性の子育てにおける社会関係の構築過程を解明するとともに、民族とジェンダーの交差性（インターセクショナリティ）が彼女たちの子育て体験にどのような影響を及ぼしているかについて議論する。

研究発表・午後の部 ［13D 教室］　14:20-14:50 / 14:55-15:25 / 15:30-16:00

発表⑯

Examining the Relationship Between Creative Thinking and Specific Types of L2 Speaking Performance

UEHARA Soshi　Hiroshima University Undergraduate Student

Among the four skills, many L2 learners struggle with speaking in a foreign language the most in Japan. Previous studies have revealed relationships between creativity and language production. However, there is a need to further specify the precise variable relations between creative task performance and speaking skills indicated by discourse markers and the number of words produced. Therefore, this study aims to clarify the relationship between divergent and convergent thinking and L2 speaking performance by evaluating word utterances and hesitations during the speaking process. Twenty university students majoring English language education, and 36 non-English major university students participated in creativity tasks and speaking tasks. Results suggest that speakers with high divergent thinking were likely to speak more during the speaking task. On the other hand, speakers who major English language education tended to process their speech with less words during the argumentative tasks. These results suggest that creativity may have an influence on specific types of speaking performance. This study aims to provide a basis for understanding how creativity emerges in speaking tasks in English language education.

発表⑰

Formeaning Response Approach を用いた詩の読解が日本人高校生の言語能力に与える影響—意味構築の活動を通じた推論力の向上を目指して—

形山 羽奈　広島大学大学院博士課程前期　学生

本研究は，文学的テクストを用いた第二言語学習が学習者の深層的理解を促進する可能性を探ることを目的としている。日本人高校生を対象に, Formeaning Response Approach（FRA）を活用した詩の読解活動を実施し，学習者が詩の意味を構築し，他者と共有する過程を観察・分析した。さらに，このアプローチが推論力の向上にどのように寄与するかを考察し, FRA が第二言語学習における新たな指導法として有用である可能性について検討する。

発表⑱

背外側前頭前野の賦活から見た日本人大学生英語学習者の英語詩読解時の反応—英語詩タイプとテクスト・エンゲージメントタイプの影響—

西原 貴之　広島大学

本発表では、近赤外分光法により、英語詩のテクストタイプとテクストへのエンゲージメントの仕方が英語詩読解中の日本人大学生 EFL 学習者にどのような影響を与えるのかを背外側前頭前野の賦活に着目して調べた調査結果を報告する。調査の結果、両要因が学習者の当該部位の賦活に影響を与えていることが明らかとなった。テクストタイプに関しては、テクスト内の行間の意味関係があいまいである英語詩を読む際に賦活が高くなる傾向が見られた。テクストへのエンゲージメントについては、テクストの字義理解のために読む場合よりも行間を読んで意味を作り上げようとする場合に賦活が高くなる傾向が見られた。ただし、本研究では要因間の複雑な相互作用と学習者間での反応の個人差も確認されており、本発表ではこれらの点についての報告も行う。

研究発表・午後の部 ［13E 教室］ 14:20-14:50 / 14:55-15:25 / 15:30-16:00

発表⑲

コラボレーション・ライティングを通じた「対話的な学び」の質的研究――バフチン的ポリフォニーの視点から――

漆畑 祐佳 静岡県立静岡商業高等学校
那須 雅子 岡山大学

新学習指導要領で掲げられている「主体的・対話的で深い学び」のうち、特に「対話的な学び」を実現するために、クラス英詩のコラボレーション・ライティング活動を実践した。高校英語の授業において、特に仮定法の学習は、文法の暗記中心な学習に陥りやすいと考えられる。そこで、「対話的な学び」はどのように実現可能であるのかを、従来の画一的な文法の「暗記中心」からの脱却を目指し、クラス英詩のコラボレーション・ライティング活動を導入した。本発表では、クラス英詩を創作する活動と読む活動を経験した生徒たちの、自由記述によるアンケート調査結果を、KH コーダーによって分析した。その上で、バフチンの対話理論を基にしたバフチン的ポリフォニーの視点から「対話的な学び」がどう実現されているのかを、生徒間の関わりと照らし合わせてその効果を検証し考察することを目的としている。

発表⑳

B. Kumaravadivelu の KARDS (Knowing, Analyzing, Recognizing, Doing, and Seeing) を用いた日本の英語科教員の資質能力の探求

渡邉 大太 兵庫県立大学・環境人間学研究科 学生
寺西 雅之 兵庫県立大学・環境人間学部

日本の中等教育の英語科教員は、偏差値重視の教育と生徒の 4 技能育成の両方を求められる。文部科学省が示した教員資質は英語科教員特有のものではなく、さらに英語科教員のための英語力や指導目標は必ずしも教員資質能力を反映していない。本研究では B. Kumaravadivelu が提唱した言語教育者が習得すべき“KARDS”という Modular Model を枠組みとして、また現場の教員から生み出される理論が重要であるという Kumaravadivelu の主張にならって、特に“KARDS”それぞれの要素の関連性を探求し、さらに英語科教員自身が“KARDS” を定義することを目指す。本研究は混合研究法の一つである Exploratory Sequential Mixed Methods Design を用いる。まず、参加者との半構造化面接を通じて上記の研究課題を探求する。その分析結果から、量的研究のための調査項目を作成し、オンライン・アンケートを通じて質的研究による教員資質能力の探求について妥当性ならびに正当性を検証する。本発表では、研究目的、そして質的研究における調査内容の途中経過に焦点を当てる。

発表㉑

学習指導要領と検定教科書の変遷からみる英語科授業での音読活動

輿石 采佳　東京大学大学院教育学研究科　学生

英文の音読が外国語学習において一定の効果をもたらすことは，様々な先行研究から，あるいは学習者・授業者の実践知から既に周知されているといえる。個人で学習する際の音読と，学校での授業内の音読とでは，学習環境や時間の制約などの点において大きな差異があり，特に授業内音読活動については方法論の検証が多くなされている。様々な音読方法が検証されている現状において，授業における音読活動の目的や扱いに立ち返った検討を行うことで，学習者にとってより有意義な音読活動が実施できると考える。中等教育段階の授業の指針となるものは学習指導要領および，検定教科書である。したがって本研究では，中等教育段階での授業内音読活動に焦点を当て，学習指導要領の差異が音読活動の目的や形態，扱いにどのような変化をもたらすか，また，学習指導要領での音読活動の扱われ方が検定教科書の記述にどのようにあらわれているのかを比較検討する。

研究発表・午後の部 ［13F 教室］　14:20-14:50 / 14:55-15:25 / 15:30-16:00

発表㉒

センテンス・コンバイニング練習が英作文の複雑さに及ぼす影響

麻生 雄治　大分大学

学習者のパフォーマンスを測定する際の指標として、複雑さ、正確さ、流暢さがあるが、日本の学校現場での英語ライティング指導では複雑さは他の 2 つに比べ軽視されているように思われる。英語を母語とするの国々の初等・中等学校では英文の複雑さを高めるために、単文を新たな派生形を作るために結合させるセンテンス・コンバイニング（SC）の練習が多く実践されているが、日本の英語教育ではほとんど実践されていない。実際、日本国内で使用される教科書や問題集の中に SC という言葉はほとんど出てこない。そこで、本発表では、短期間の SC 指導と練習で、日本人大学生の英作文の複雑さは向上するかを混合研究法を用いて検討した。その結果、SC の指導は英作文の複雑さの向上に貢献し、日本のライティング指導における SC 練習の実現可能性が示唆された。が、同時に、日本人英語学習者に適する SC の練習の在り方の難しさも確認された。

発表㉓

Beliefs and Strategies in English Learning Among Japanese University Students

王 鏡洲　岡山大学大学院社会文化科学研究科　学生

This study investigates Japanese university students' beliefs about language learning, with a focusing specifically on English acquisition, aiming to understand their attitudes, confidence and motivations in English language acquisition and explore how beliefs about language learning affect their English studies.

The study categorized learners' beliefs into analytical learning beliefs such as breaking down grammar rules, focusing on sentence structures, memorizing vocabulary, and analyzing linguistic patterns. In contrast, experiential learning beliefs which reflect a preference for engaging in activities such as speaking practice and consuming English-language media. The study also explored which beliefs students hold, which learning strategies they employ, how confident they feel during English study, by using a questionnaire among 102 English learners in a regional national university in Japan.

The results of the questionnaire are that analytical learning beliefs are the beliefs most learners hold. Students who view language learning positively are more likely to hold experiential learning beliefs. This study also found that the number of students who holds experiential learning beliefs but using analytical learning strategies are the most.

These findings highlight that EFL learners' beliefs influence their methods and outcomes, suggesting a need for interactive, confidence-building programs and further research on motivation-belief relationships in language acquisition.

発表㉔

メタバース上での主観評価測定のためのツールの開発と評価

李 明宜　東京大学工学系研究科システム創成学専攻　学生

近年メタバースの応用が普及している中、メタバース上での人のふるまいの研究が必要になっている。しかし、メタバース上でヘッドマウントディスプレイを外したら心理状態が変わる可能性があることを踏まえて、メタバース上で心理測定をするための汎用的なツールが必要であると考えられる。本研究の目的は、メタバース上で利用可能な質問紙調査作成のための汎用的なツールを提案し、その有効性を検証することである。

開発したツールは VRChat で作られるワールドで用いられるものであり、質問項目の数に制限がなく、選択肢の数は 11 までである。開発したツールの有効性を検証するために、現実世界での等価な調査と比較することにより、その信頼性及びユーザビリティを評価する。具体的には、開発したツールと Google Form でそれぞれ３つの心理測定尺度の質問紙を被験者に回答してもらい、ユーザビリティ評価を行うとともに信頼性を評価する。

講演／シンポジウム（午前の部） ［13Q 教室＋ハイブリッド・ライブ配信（Zoom）］ 11:20-12:20

特別講演：ただ落ち込むこととうつ病の境界線

講師：黒沢 顕三　JCHO 東京新宿メディカルセンター 精神科主任部長

司会：深谷 素子　鶴見大学

1980 年に改訂・出版されたアメリカ精神医学会による DSM-Ⅲ（精神疾患の診断・統計マニュアル第３版）の登場後、精神疾患に対する診断学が大きく変化した。うつ病に対する診断学もその例外ではなく、過去二千年を越えて蓄積されてきたメランコリー概念を否定的に発展させたエミール・クレペリン（1856-1926）が、躁うつ病概念を提唱して以来の画期的変化がもたらされた。だがその変化は必ずしもポジティブなものだけではない。DSM-Ⅲでは横断的診断を採用しているため、これまでの病状経過や、「生活歴」と言われる患者の生活背景が軽視される傾向にある。その結果、伝統的な精神病理学的には比較的明確であったうつ病（内因性のうつ病）と健常な落ち込み（心因性のうつ状態）の区別が付きにくくなり、うつ病診断の精密性が毀損されている可能性がある。今回はうつ病概念の変遷を概観するとともに、実臨床での具体的問題点を指摘し、新たなうつ病診断学の可能性を模索したい。

講演・シンポジウム（午後の部） ［13P 教室＋ハイブリッド・ライブ配信（Zoom）］ 16:10-17:40

シンポジウム：経験を語る、教育を紡ぐ―ナラティブ研究の新たな可能性―

講師：坂本 南美　同志社大学

渡辺 敦子　文教大学

石野 未架　同志社大学

久世 恭子　東洋大学 / The University of Liverpool（オンライン登壇）

寺西 雅之　兵庫県立大学

那須 雅子　岡山大学

Karen E. Johnson　The Pennsylvania State University（ビデオ登壇）

言語教育におけるナラティブ研究は、教師や学習者がどのように自己の経験を意味づけ、自らを再認識するかを理解するための重要なアプローチの一つである。本シンポジウムでは、ナラティブ研究を通して、日本の英語教育に携わる教師や学習者がどのように自己の経験を紡ぎ出しているのか、その諸相を探る。具体的には、シンポジウムの前半は二つのセクションに分け、まず日本の中学校、高等学校、大学に勤務する熟練教師、新任教師を対象としたナラティブ研究を取り上げる。続いて、日本の大学の文脈における英語学習者や語学学習に成功した人たちのナラティブを通して、学習経験やライフストーリーに関わる研究に焦点をあてる。また、後半のディスカッションでは欧米で大きな流れを作るナラティブ研究が、日本の教育現場という文脈でどのように貢献し得るか、その可能性も含めてフロアの皆さんとともにナラティブに関する議論を深める。

ポスターセッション 13M 教室：対面＋オンデマンド（PDF 閲覧） 13:00-14:00 / 3/8～3/23

ポスター①

Bootstrapping: Its concepts and applications in statistical analysis

Hachiro Uchiyama Tokushima University
Hiroki Inoue Niigata University of Health and Welfare

In quantitative studies, statistics are essential for analyzing and interpreting associations in individual, social, and natural phenomena. However, when the distribution of the dependent variable is unbalanced or unknown, the results of statistical analysis can be unreliable or misleading. Bootstrapping, a resampling method based on simulations with replacement, offers a robust solution to address these challenges particularly in data with unbalanced distributions or unknown characteristics. This presentation covers the fundamentals of bootstrapping, including its historical development, key concepts, and common applications, with a particular focus on its use in social science research.

ポスター②

プログラミング的思考力を身につける CLIL 授業教材の提案

風早 由佳 岡山県立大学
森安 はづき 岡山県立大学

2020 年度から小学校第 5, 6 学年で必修化されたプログラミング教育を進める上で、情報活用能力（プログラミング的思考力）育成と各教科の学びを結び付けた授業実践が行われている。本研究では、プログラミング学習が導入されている高学年へのスムーズな接続を可能にさせることを目的として、低学年～中学年を対象に、各教科内容を学びつつ、プログラミングの基礎的な考え方を理解することができる教材のデザインを行う。国語、算数、理科、生活等の教科の学習内容を学びつつ、プログラミングに必要となる基本的な要素「順次・分岐・反復」を取り入れた教材の提案を行う。

ポスター③

協働学習を通じた学習者の発音への意識変容調査

森田 愛未 岡山県立大学 学生
風早 由佳 岡山県立大学

本研究では、大学入学時の英語学習者への３年間のアンケート調査を実施し、音声面の習得に関する意識は、他の技能と比較して高いものの、学習方法の難しさや集団の中で発音する恥ずかしさなどが音声習得の妨げとなっていることが明らかになった。そこで、集団授業における音声習得をスムーズに行うための教材開発をするための予備調査として、個人での発音練習から集団でのスキット作成へと段階を踏んだ協働学習を取り入れた授業デザインを行い、実践に取組んだ。それぞれの活動を録音・録画して記録し、それらの分析によって発音の変容過程を明らかにすると共に、事後アンケート調査の結果を分析することで、協働学習が学習者の発音意識の向上に与える影響について考察する。

ポスター④

海外文化紹介のためのデザイン提案

廣岡 瑠唯　岡山県立大学　学生
森本 芽衣　岡山県立大学
森安 はづき　岡山県立大学
森田 愛未　岡山県立大学
松村 歌音　岡山県立大学
大崎 桜子　岡山県立大学
佐藤 綾佳　岡山県立大学
大月 希海　(株)ハローズ
風早 由佳　岡山県立大学

本研究は、2023 年から 2024 年に行った海外文化を紹介する冊子作成と展示を通じて、海外文化を伝えるエディトリアルデザイン、展示計画に重要な要素を考察する。特に、誌面づくりにおいてメインコピー／メインビジュアル、コピー／ビジュアル、本文のデザインの強弱は、興味を惹きつけるデザインを行う上で重要である。これらの要素に加え、冊子であれば綴じ方を意識したフォントや行間の調整を行う必要がある。読者が適切な情報量を適切な順で読めるよう誘導する誌面デザインを実現するために、実際に作成した誌面をもとに、紹介する国のイメージを伝える色彩計画や誌面構成におけるデザインの実験的考察を行う。

ポスター⑤

2000 年代ライトノベルと江戸期黄表紙に見るパロディの系譜―アダプテーション論を背景に―

米山 遼史　鶴見大学大学院文学研究科ドキュメンテーション専攻　学生

本研究は、2000 年代のライトノベルと江戸期黄表紙における共通点を、各テクストに含まれる「パロディ」の分析を通して、アダプテーション論の観点から考察するものである。
ライトノベルは特に 2000 年代に入ってから若者向けの娯楽小説として認識され、会話文を多用しながら、平易な文体で描かれることが特徴である。そこには、漫画・アニメとの親和性が見られる。一方黄表紙は、諧謔的な洒落や風刺が多く含まれた大人向けの読み物として、江戸時代後期に発展を遂げた。両者共に同時代の主流の文学とは一線を画す、娯楽的な内容と文体が特徴である。また読者間でパロディが盛んに共有されていたことも共通している。
本研究では、各テクストに頻出するパロディを抽出し、アダプテーション論の観点から比較分析を行う。これによりライトノベルを日本文学における非主流・娯楽文学の系譜に位置付けると共にその実相を明らかにする試みを行う。

ポスター⑥

スイスの観光地を巡るコミュニケーションの分析―環境、文体、異文化理解の視点から―

寺西 雅之　兵庫県立大学
那須 雅子　岡山大学
吉田 安曇　岡山大学

環境文体論は、自然環境や環境問題に関係するテクストの内容と様式を対象に、環境への正・負の影響の観点から分析・考察する学術分野である。本発表では、世界遺産等において環境破壊や異文化理解の齟齬が深刻化する状況を踏まえ、壮大な自然環境を誇る観光立国スイスで行ったフィールド調査について報告する。現地において収集したテクストを取り上げ、環境保護、翻訳及び異文化理解の観点から内容及び文体の分析を行う。分析に際しては、Virdis (2022)が示した環境ディスコースの分類（beneficial（有益）, ambivalent（両義的）, destructive（破壊的））に基づき、テクストの「環境意識度」を評価する。さらに、現地で入手可能な英語、独語、日本語等の複数の「翻訳テクスト」を比較分析することにより、環境と異文化理解の問題についても考察したい。

ポスター⑦

サーキュラーエコノミーにおける建築設計・街づくりの事例視察及び現地住民に与える効果測定

寺西 志帆理　京都大学大学院工学研究科建築学専攻　学生

本研究は、前田記念工学振興財団の研究助成を受けて実施したものである。世界全体として持続可能な社会構築への需要が高まる中、欧州では現地の資源や地域ならではの施策を用いてサーキュラーエコノミーを推進する事例が多数存在する。中でも本研究では、住民の環境への意識が高く住民の手で自走する「住民参加型」のまちづくりに着目した。調査は現地視察と周辺住民へのヒアリング調査から成る。視察対象地域はストックホルム、アムステルダム、ヘルシンキの 3 都市であり、各都市でサーキュラーエコノミーを体現する建築物・街並みの視察を行った。また、ドイツのミュンヘン工科大学では、廃棄物利用や住民との共同制作活動等に積極的に取り組む研究室を訪問し、教授への取材と専門家が集まる展覧会への参加の中で意見交換を行った。そして、4 都市において住民自らが積極的に環境への取り組みに参加する生活の実態を街中でのヒアリングによって調査し、視察した都市計画や建築物の効果との結び付きを考察した。

ポスター⑧

日米の大学間協働による国際理解教育の試みと成果―異文化交流の形態の差異に着目して―

杉本 貴代　愛知大学短期大学部

本研究では、日米の短期大学生同士の異文化交流が、いかに個々の学生の国際理解と学びの深化を促進するかについて、日米の短大生を対象に観察、ヒアリングおよび質問紙調査等を用いて検証した。具体的には、愛知県内と米国ハワイ州内の短期大学生同士の異文化交流の①形態②内容③事後の学びの成果と発展について、2016 年度から（コロナ禍を含む）2024 年度までの過程を追跡した。研究対象者は、日米の教養教育課程で学ぶ短大生であった。両国の短期大学が協働し、学生の意見を取り入れることにより、包摂性と多様性に満ちた異文化交流プログラムが実現した。異文化交流の成果について、交流の形態（現地研修 or オンライン研修）ごとに分析した。その結果、学生同士の自然な交流が持続するような米国側からの働きかけが、事後の学びの発展と国際理解の深化に結びつきやすいことが示唆された。

ポスター⑨

大学生の英語学習動機とライフストーリー：専門領域との結びつきに注目して

那須 雅子　岡山大学

本発表では、日本人大学生の英語学習における動機付けについて、専門領域との結びつきと個々のライフストーリーに着目し、アンケート調査とナラティブ分析を用いて考察を行った。大学入学後の学生を「アクティブ型」と「パッシブ型」の 2 つに分類し、特にアクティブ型の学習者に焦点を当てた。それぞれの動機や専門領域との関わり、さらにそれらが学生のライフストーリーにおいてどのように位置付けられているかを TEM（Trajectory Equifinality Model）で分析した。これにより、大学生の英語学習動機の変容を解明するとともに、学生の状況に応じた動機付けの実践方法を提案する。

ポスター⑩

インドに渡った日本画家たち―伝統とその概観―

五十嵐 潤美　岡山大学

本発表では、明治時代以降にインドに渡航した日本画家たちの足跡をたどります。1903 年に岡倉天心がインドを訪れ、インドの文化人たちと交流を始めて以降、多くの日本画家がインドにわたりました。岡倉に派遣された者、インドの学校に招かれた者、自ら修行のために渡印した者など、きっかけは様々ですが、まるで日本美術院の伝統であるかのように、現代にいたるまで多くの日本画家たちがインドを訪れています。彼らがそこで何を学んだか、制作にどんな影響があったかなど、不明なこともまだ多いですが、少しずつ明らかになってきています。それらの情報をふまえ、日印美術交流の全体像をつかむため、渡印日本画家たちについてマップ、チャートなどで提示し概観します。

ポスターセッション　オンデマンド（PDF 閲覧）：特設サイトより閲覧　13:00-14:00 / 3/8～3/23

ポスター⑪

Shared Reading and Its Application in English Teaching in Japan

KUZE Kyoko Toyo University / The University of Liverpool

This study aims to introduce the Shared Reading (SR) project and discuss its application in English language teaching in Japan. SR is a Liverpool-based initiative organised by The Reader, a UK national charity that uses the power of literature and reading to transform lives within communities. Among its many significant purposes such as enhancing wellbeing, this paper focuses on its potential for second or foreign language development. It begins by exploring the role of SR for speakers of English as an additional language, drawing on data collected by the organisation. The paper then examines the benefits, as well as any challenges, of SR based on notes taken by the researcher, who has participated in several SR groups as a member. An autoethnographic approach is employed in this section to analyse the perspectives of an English learner. Finally, the paper discusses the potential application of SR in English teaching in Japan, concluding that SR holds promise for this context. The paper suggests that some practices can be effectively adapted, while modifications may be necessary for implementation in school settings, particularly in relation to course development, assignments, and learner evaluation.

ポスター⑫

「俊寛」から見るナラティブの変容

岩尾 祐介　中村学園大学

俊寛僧都は平安時代に実在し、平清盛によって島流しにされた人物である。俊寛については『平家物語』に始まり、能の『俊寛』、人形浄瑠璃や歌舞伎の『平家女護島』、菊池寛や芥川龍之介の小説など、さまざまな文芸的・演劇的表現を通じて描かれてきた。このような人物は、海外でもリチャード三世やナポレオンなどの例がみられる。
各時代の社会的背景や受容者の期待に応じて、俊寛のキャラクター造形、物語の展開、登場人物の役割が再解釈・再構築されている点が特徴である。たとえば、中世の能では仏教的救済が強調され、近代文学では個人の苦悩や存在論的テーマが協調されている。
今回は、歴史人物を題材とした物語が、時代やメディア、そして受容者の解釈によっていかに多様に変化し、新たな意味を獲得していくのかを明らかにする。これにより、ナラティブのダイナミズムと、物語が社会や文化の中で果たす役割について、より深い理解を得る。

ポスター⑬

地域在住外国人との交流活動が高校生の異文化理解意識に与える影響―国際交流協会と連携した授業の実践を通して―

山口 智恵　兵庫県立吉川高等学校 / 兵庫教育大学大学院　学生

本研究の目的は、英語に苦手意識があり、外国人との交流機会が少ない高校生を対象に、異文化理解への意欲や共生の必要性、国際的な視野を育むことである。兵庫県内の公立高校第 2 学年の生徒 54 名を対象に、国際交流協会と連携して地域在住のエジプト、ラオス、モンゴル出身の講師による特別授業（各国 45 分）を日本語で実施した。授業では各国の文化や歴史を学び、質疑応答や民族衣装試着、ダンスなどの体験活動を取り入れた。授業前後に異文化理解に関する質問紙調査と自由記述による振り返りを実施し、生徒の意識変容を分析した。その結果、外国文化への関心、他者の意見や価値観の尊重、視野の広がりなど、ほとんどの項目で統計的に有意な意識の向上が確認された。また、振り返りの自由記述からも、異文化への理解が深まったことや積極的な姿勢の変化が示唆された。今後は自由記述分析を加え、意識変容の詳細をさらに検討する予定である。

ポスター⑭

公立小学校 4 年生を対象とした SDGs の視点に基づく教科横断的指導の実践―伝統工芸をテーマにした国語科と社会科の単元設計と評価―

木嶋 優水　横浜市立浅間台小学校 / 兵庫教育大学大学院　学生

本研究の目的は、公立小学校 4 年生を対象に、SDGs の視点を取り入れた教科横断的指導の実践を報告し、その教育的効果を児童の成果物や授業中の観察を通じて考察することである。横浜市立小学校 4 年生 21 名を対象に、国語科と社会科を関連付けた合科的授業を実施した。国語科では「未来につなぐ伝統工芸品」をテーマに「目的を意識し、要約すること」、社会科では「伝統工芸品を生かしたまちづくり」を取り上げ、「地場産業と地域発展について考えること」を学びつつ、SDGs に関連付けた意見文の作成を目指した。学習方法として一斉学習と個別最適な学習を組み合わせることで、児童が主体的に学ぶ姿が観察された。今後の課題としては、児童が SDGs とのつながりを自ら発見し、学びを深める工夫が必要であることがあげられる。さらに、継続的な指導や評価方法を改善し、事後アンケートなどの定量的分析を通じて効果検証を進める予定である。

ポスター⑮

「総合的な探究の時間」に対する生徒の認識と批判的思考態度との関係性―国際バカロレア「知の理論」と比較して―

中村 可奈子　兵庫県立有馬高等学校 / 兵庫教育大学大学院　学生

本研究の目的は、高等学校「総合的な探究の時間」に対して、生徒がどのような認識を持つと批判的思考態度が育成されやすいのかを明らかにすることである。
現在グローバル化が進む中で、自分の持つ認知バイアスを振り返りながら、多角的な視点で物事を捉え、偏ることなく他者を理解しようとする批判的思考態度が求められている。平成 30 年度改訂高等学校指導要領では、「総合的な学習の時間」が「総合的な探究の時間」へと変更されるなど、探究学習に力点が置かれ、批判的思考態度および能力の育成が試みられている。しかしながら、当授業に対する生徒の認識および批判的思考態度との関係性については明らかになっていない。
そこで、本研究では「総合的な探究の時間」と、批判的思考力の育成を目的とした国際バカロレアのコア科目「知の理論」とを比較しながら、学習環境に対する生徒の認識と批判的思考態度との関係性について検討する。

ポスター⑯

アメリカ映画にみる呼称

笠本 晃代　岡山大学大学院

ユーモアに富んだアメリカ映画数作品の中から、英語の日常会話における呼称を考察していく。とりわけ相手と自分の関係を主軸に、親族名称の使い方を検討してみたい。

ポスター⑰

大学を核とした地域活性化の実現に向けた提言（博論ワークインプログレス）

坂本 萌歌　関西学院大学国際学研究科博士課程前期課程　学生

日本における大学（学部）への進学率は約 6 割、高等教育機関への進学率は 8 割を超え、今や高等教育の機会は一般的になりつつある。
その一方で、日本において大学の所在地には偏りがあり、県内での格差もみられる。
大学進学率が上昇するなか、特に通学可能圏内に大学がない地域においては、若年人口の流出やそれにともなう過疎化がますます深刻になると予想される。
通学可能な大学が不在である地域において、なぜこれまで大学の必要性が重視されてこなかったのか。
本研究では、まず人口問題や国土および地域政策、大学の立地政策についての国際比較を行い、日本の特性について明らかにする。次に、地域行政や住民のオーナーシップの度合いに着目し、大学誘致または設立に成功した地域との差異を検討する。大学を核とした地域活性化に資する提言の抽出を目指す。